福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

地域組織間連携による学校支援ボランティア事業におけるボランティア学生への支援体制の構築：「ふり返りシート」を用いたケースカンファレンスの実践とその質的分析を通して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 静香, 織田, 安沙美, 大西, 将史, 廣澤, 愛子, 笹原, 未来, 松木, 健一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/10453

福井大学教育実践研究　2017，第42号，pp.63－69

実践論文

地域組織間連携による学校支援ボランティア事業における ボランティア学生への支援体制の構築 ―「ふり返りシート」を用いたケースカンファレンスの実践とその質的分析を通して ―

福井大学大学院教育学研究科発達障害支援コーディネーター　鈴　木　静　香
福井大学大学院教育学研究科発達障害支援コーディネーター　織　田　安沙美
福井大学大学院教育学研究科　大　西　将　史
福井大学大学院教育学研究科　廣　澤　愛　子
福井大学大学院教育学研究科　笹　原　未　来
福井大学大学院教育学研究科　松　木　健　一

筆者らは2017年度から，ボランティア学生が自身の活動を省察する場としての，質の高いケースカンファレンスのあり方を検討するなかで「ふり返りシート」を用いたケースカンファレンスを試みている。

本論文では，実際に児童生徒の支援にあたるボランティア学生の支援体制を構築する為の「ふり返りシート」を用いた実践的な取り組みを紹介するとともに，活動の初期段階において学生が着目する観点の傾向を分析した。その結果，「LPの係わり方」，「対象児の理解」という観点に着目する傾向があることが明らかになり、ボランティア学生への支援体制構築の強化に向けた今後の示唆を得た。

キーワード：学校支援ボランティア，支援体制の構築，ケースカンファレンス，振り返りシート，ファシリテーター

Ⅰ．問題と目的

心理臨床や学校実践において，円滑な支援を展開していく為に，活動を行う者が自身の活動を振り返り，同じ立場にある他者等と実践事例について検討し，互いの意見や情報を交流させるという営みは欠かせない。こうした取り組みは，医師や看護師が臨床事例について互いの意見を交流させるケースカンファレンスの手法を教育実践に応用する試み[1]から始まったと言える。

このような話し合い場面は，「振り返り会」や「ケース会議」，「語り合い」，「事例研究」などと呼ばれ，学校支援ボランティア事業を行っている様々な大学において行われている。現在，学校現場では不登校，いじめ，発達障害など様々な困難を抱える子どもたちがおり，その対応も多様なものが要求されている[2]．その為ボランティア活動の広がりや多様性・単位化との関連からも事後指導や振り返り会の重要性が高まっている[3]。

一方で，学生自身の実践の省察や子どもの理解，支援方法の在り方を体得する上で真に役立つケースカンファレンスの実現には，いくつかの課題があることも指摘されている。運営面においては，グループに分かれてケースカンファレンスを行う場合のマンパワーの不足が挙げられ，新たに教職員を雇っている高等教育機関もある[4]。また，医学や保育領域のケースカンファレンスについての先行研究によれば，「ケースカンファレンスが雑談や指導の場として閉塞してしまう」[5]，「時間が足りない，意見が片寄る」[6]といった意見の例もあり，進行する役割であるファシリテーターの技術の向上・質の担保が求められる。

学校支援ボランティア事業における実践の省察の場に関する研究としては，山本（2014）[7]が，教員の入職初期の「質保証」という視点から「振り返り会」を運営するにあたって作成した「評価シート」を用いた実践を紹介している。シートは振り返り会での学生の記述内容に即して改訂が行われており，改定の過程と活用の可能性が報告されている。福井大学において学校支援ボランティア（ライフパートナー：以下，LP）事業の支援体制づくりに携わってきた筆者ら[8]も，今後の課題として上記取り組み等を参考にしながらLP活動に見合ったふり返りの場の質をさらに保証していく必要性を述べている。このことから筆者らは，学生が自身の活動を省察する場としての質の高いケースカンファレンスのあり方を検討するなかで「ふり返りシート」を用いた実践を試みるに至った。

そこで本稿では，①「ふり返りシート」を用いたケースカンファレンス1での取り組みを紹介し，②そこで作成した「ふり返りシート」の意見から，LP活動初期段階で学生が着目する観点を分析・考察し，ボランティア学生に対する支援体制の構築に関する今後の示唆を得る

ことを目的とする。

Ⅱ.「ふり返りシート」を用いたケースカンファレンスの実践

1．LP 事業におけるケースカンファレンス

地域組織間連携によって成立する本事業において直接児童生徒を支援するのは，大学に在学する学生である。彼らは「学校教育相談研究」という必修の授業を通年受講するなかで，LP 活動（1回2時間× 12 回）を行うことになる。

松木（2015）[9] は，気がかりさをもつ児童生徒にかかわることがどんなに有意義であったとしても，実践と講義が切り離され，講義が単独で存在するようならば効果はないと述べ，「ライフパートナー活動をすることが，自分自身の成長にかかわってくることを自覚できる仕組みが存在すること」や「活動を振り返る機会を繰り返しもつこと」の重要さを強調している。学校教育相談研究の授業は，①不登校や発達障害といった，現場で出会うと思われる児童生徒が抱える課題についての知識と理論を講義で学び，②学校や適応指導教室，家庭など各派遣先で LP 活動を行い，③ケースカンファレンスで省察する，という仕組み[10] になっている（図1参照）。①～③を同時期に行ったり，繰り返したりする授業の仕組みによって，活動を省察する機会が保証されていると言えよう。

2.「ふり返りシート」を用いたケースカンファレンスの実際

1) 実施時期と参加構成員

学校教育相談研究前期授業8回目（H29.6.19）に，ケースカンファレンス1を実施した。参加者は，LP 活動開始初期の学生・LP 活動未経験の学生，ファシリテーターを努めるティーチングアシスタント（以下，TA）及び教員で構成されている。TA は LP 経験のある本大学院の学生であり，ファシリテーターの役割の説明を事前に受けている（表1参照）。尚、ファシリテーターの役割・進め方に関する説明文書作成に当たっては、松本（2007）[11] のファシリテーター研修についての研究を参考にした。グループによっては，昨年度も LP 活動に参加した経験のある学生や市教育委員会指導主事，適応指導教室相談員が加わっている。派遣市町や専攻ごとに分けられたグループ（6名～ 25 名）で2名の学生が発表（平均4回）した。人数にばらつきがあるため，グループによってはさらに2グループに分かれてカンファレンスを行っている。

2) 実施方法

昨年度まではファシリテーターが進行役を務めながら，発表者が毎回の活動後に作成する活動報告書を聴き手に配布し，それを元に発表，その後口頭で質疑応答するという形をとっていた。しかし口頭での質疑応答では，発言者に偏りがみられたり，取り上げられる話題に制限が生じたりする傾向があると思われた。

これらのことから，グループに1枚配布された「ふり返りシート」（A3, 横 , 図2・3参照）と付箋を用いてケースカンファレンスを実施することにした。この方法は，学生が発表を聞いて感じたこと・考えたこと・質問等を自由に付箋に記述し，シートに貼ることで，取り上げたい点を平等に話し合いの場に提示できる。また，付箋の意見をすべての参加者が共有できるという利点があると考えられる。具体的には，聴き手の学生が，発表者一人に対し3枚配布された付箋に感想や疑問，質問などを自由記述しふり返りシートに貼った。また発表者の学生も発表して改めて感じたこと等を自由記述し，シートに貼るという形で，振り返りシートを作成していった。尚，聴き手と発表者の意見を区別するため，付箋の色を指定して配布した。付箋を貼った後，教員や TA が意見をグルーピングしたり，活動経験者の学生がリードしたりしながら，グループごとにシートを活用してケースの理解や省察を深められるようカンファレンスを行った。回収後は資料をコピーし，次回の授業の際に発表者に返却した。ケースカンファレンスの場では発表に手一杯だった学生が，改めてシートを見ることで新たな省察を得て，今後の活動に活かすことが期待される。

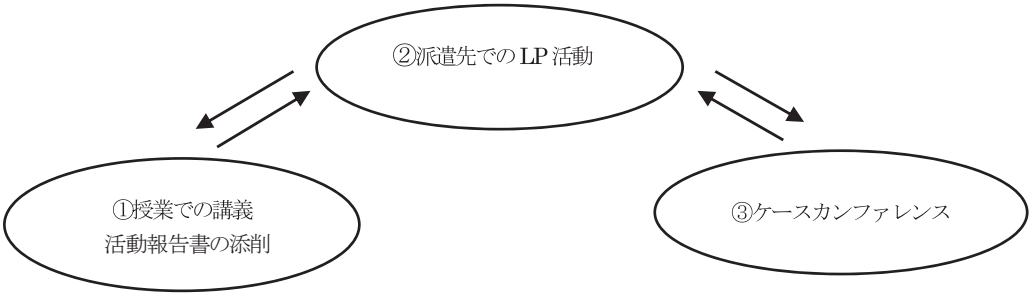

図１．LP活動を支える授業の仕組み（鈴木ら，2016）

表１．ファシリテーターの役割・進め方について

ケースカンファレンスにおけるファシリテーターの役割・進め方について
1)ファシリテーターの役割
・主体性をもって話し合ってもらうために、参加者であるグループの学生を主役にする。
・無理に場を仕切ろうとせず、議論が深まるようにメンバー同士の話し合いを促す。
・発言者が偏らないように配慮する。
※発言を促すにあたっては、表情や雰囲気から、発言したい人、発言したくない人、場に参加できていない人を把握しながら、無理強いすることなく行う。
・人の話を積極的に聞き、グループのメンバーもそれに倣うような見本を示す。
・グループのメンバーの発言を記録し、整理し、要約する。
2)ケースカンファレンスをどのように進行するか？
・1回目（インテーク：出会い）で一度区切り、質問などをする時間を取る。
①対象児がどのような子どもであるのか、聞き手がイメージしやすいように臨床像（表情・服装・話し方・体格・印象など）を発表者に語ってもらう。（大学と地域の連携による不登校・発達障害児への支援2014 P54～59参照）
②主訴は何か、対象児が何に困っているか、分かる範囲で伝えてもらう。
③発表者であるLPが最初の出会いで感じたこと、疑問に思ったことなどを聞く。
・2回目から前半（全活動回数の半分の回数まで）で一度区切って、感想や質問を受け付ける。発表者にも聞き手に聞きたい事柄などあれば、話してもらう。
・最後に活動後半の発表をしてもらい、感想や質問を問う。グループメンバーの発言を記録し、整理し、要約してフィードバックする。発表者が悩んでいることなどあれば、取り上げて聞き手からも回答を得る。

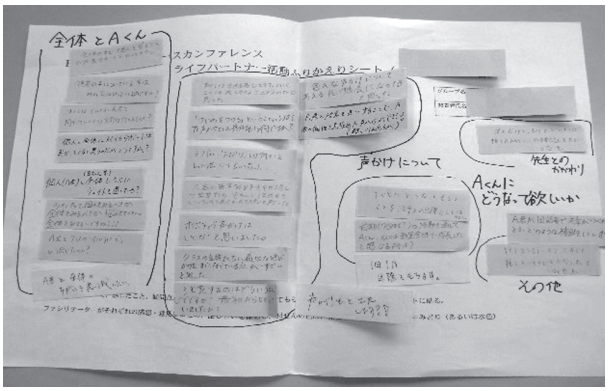

図２．ふり返りシート（全体）の一例

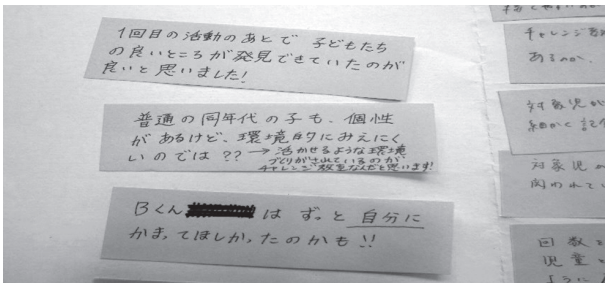

図３．ふり返りシート（部分）の一例

Ⅲ．「ふり返りシート」の分析

１．分析対象

ケースカンファレンス1で作成・回収したふり返りシートに挙げられた聴き手のすべての意見（感想･疑問･質問等を含む）を対象とする。学生はケースカンファレンス1までに,「LP の実際」,「適応指導教室からの報告」,「不登校についての現状と課題」といった講義を受けて知識・理論を学び,「LP 経験者体験発表」を聴いて実際の活動のイメージを得ている。尚，発表者の意見は立場が異なる為，分析対象としなかった。

２．分析方法

データに合った新しい概念を生成することを特徴とする，グランデッドセオリー法（岩壁 ,2010）[12] のプロセスの一部である，カテゴリー生成や構成の方法を参考に分析を行った。分析は，臨床心理士の資格をもち，学校や教育相談機関での臨床経験がある第一著者と第二著者が行った。はじめに，シートに貼られた意見を折半し，各々で類似する意見を分類してカテゴリー生成を行った。次に，それぞれが生成したカテゴリーを参照し，共に再度カテゴリーの生成と修正をし，意見の分類を行った。（この時点で共通したカテゴリーが主に上位カテゴリーとして精製されていった。）同時に, 下位カテゴリーが生成され，上位カテゴリーと下位カテゴリーを構成していった。すべての意見を上位及び下位カテゴリーに分類しながら，両カテゴリーを繰り返し検討し，新たなカテゴリーを作成したり，修正したりするプロセスを積み重ねていった。このような過程を経て，上位及び下位カテゴリーを精製・構成していった。

Ⅳ．結果と考察

１．LP 活動初期における活動を捉える観点

「ふり返りシート」に挙げられた意見のカテゴリー分けとカテゴリーごとの割合は表2の通りである。LP 活動初期段階において，学生が活動に対してどのような観点に着目する傾向があるかが示されていると言える。同時に, 活動初期に直面する課題であるとも考えられよう。

上位カテゴリーにおいては,「2. LP の係わり方」に関する意見が N=182（35％）と最も多く，対象児との直接的な係わりの場面に対して関心が高いことが示された。特に「(2) コミュニケーションの取り方」(N=68,13％),「(3)LP としての態度」（N=50,10％）に関する記述が多くみられた。前者について，目の前にいる対象児に対して，どのようなタイミングで，どんな手段をもって働きかけていくかといったことは，LP 活動でまず直面する課題と言えよう。対話や身体を動かすこと，学習支援，子どもの興味･関心に沿った活動, あるいは見守りといった間接的な係わりなど，コミュニケーションの方法や質に関して実に様々な形で意見や感想・疑問・質問が挙げられている。よって「コミュニケーションの取り方」は最も関心の高い事柄であると同時に，着目しやすい観点であると言えよう。後者については，派遣先からの多様化したニーズと学生の LP に対するイメージ，現場での対象児からの働きかけに応じた対応をすり合わせる過程において，どのような立場や役割で対象児の前に存在していくのかという観点への関心の高さが示されていると思われる。

表２.「ふり返りシート」に挙げられた意見のカテゴリー分けとカテゴリーごとの割合（N=519）

上位カテゴリー	下位カテゴリー	具体例	N(%)
1. 対象児の理解（アセスメント）			**125（24%）**
	(1)対象児の見立て	・「多動性」の子の症状はどういったものですか？ ・教室に行きたくなさそうな足取りや、ゲームをしていて表情が曇っていたというのが分かったところがよく見れているんだなと感じた。	102（20%）
	(2)集団の見立て	教室に入っての支援は相談室等での活動とは違って周りの進度に合わせていかなければいけないので難しいと思った。	12（2%）
	(3)対象児の変化	活動を通してAくんが変わっていっているように思いました。おとなしい子が自分から話すようになるのは大きな進歩だと思う。	11（2%）
2. LPの係わり方			**182（35%）**
	(1)声かけの仕方	・授業に集中できていない子に声かけをする時はどうすれば良い？その子が授業が嫌にならないような。 ・注意すべきところを探すのでなく、その子の良いところを探してほめてあげたらいいと思った。	33（6%）
	(2)コミュニケーションの取り方	・Aちゃんに対して質問するだけでなく、自分のこと、大学のことなどを話しても楽しいと感じるのでは。 ・担当の子に無視されたときは、また同じように話しかけるか、隣にそっと寄り沿っていくか、どちらが良いのか？	68（13%）
	(3)LPとしての態度	・その子の特徴を見極めて、その子のペースに合わせる大切さ。 ・全ての活動において、Aくんの主体性を尊重して、自分は一歩離れて見守るという姿勢をとっていて良いと思った。	50（10%）
	(4)展開の仕方	・話の話題は、最近の自分の出来事を話して、そこから広げられたら良いのではないかと思います。 ・集中力が続かないようだったら、「これが終わったら〇〇をする」（〇〇はA君の好きなこと）というように約束を決めるといいと思いました。	16（3%）
	(5)活動の枠組み	支援するときの授業は毎回ちがう？	15（3%）
3. LP−対象児関係			**60（12%）**
	(1)関係を築く	自分自身の立ち位置を1回目の活動で考えられていてとても良いと思った。	24（5%）
	(2)信頼関係	深入りしすぎないように心がけつつも徐々に信頼関係を築けている感じが見受けられる。	17（3%）
	(3)距離感	距離が近すぎる→難しい　友達のようで友達ではない。	19（4%）
4. 活動の見通し			**48（9%）**
	(1)活動目標	子どもたち全員と話す！という目標が良いなと思いました。	14（3%）
	(2)活動方針	Aちゃんが取り組みたいと思うことをやっていく、という内容で進めればよいと思う。	28（5%）
	(3)事前の準備	Aちゃんの好きなジャニーズ情報とかをあらかじめ調べて話題提供してみてもよさそうと思った！	6（1%）
5. 派遣先教師等との連携			**16（3%）**
	(1)情報や方針の共有	担任の先生としっかり情報を共有したり、アドバイスをもらっていたりして、そこが良いなと思いました。	12（2%）
	(2)対象児に対する教師等の係わり方	先生はどんな指導をしたんですか？	4（1%）
6. LP−対象児−他児関係			**60（12%）**
	(1)LP−他児関係	・Aくんと周りの男子児童をどう結びつけていくかが課題だと感じた。 ・担当の子以外も見なきゃいけないというのは大変だと思った。	44（8%）
	(2)対象児−他児関係	子どもたち同士のつながりも良く見えているなと思った。	16（3%）
7. 自身の活動を省察		・ライパは関わりをもつ（一緒に遊ぶ）だけじゃなく、1人の時間をもたせることや見守ることも大切ということに気づいた。 ・私は2回活動が終わったけどもっと子どもの特徴をつかみたいと思った。	**14（3%）**
8. 励まし		・ライパがんばっていてすごい。 ・休み時間だけでなく、授業中の支援も積極的にがんばって！	**7（1%）**
9. レポートの書き方		対象児が多く、それぞれの子について、細かく記録がしてあり、驚いた。	**7（1%）**

次に，「1. 対象児の理解（アセスメント）」がN=125（24%）と高く，なかでも「(1) 対象児の見立て」に関する記述が大多数を占めていた。見立てについて松本・金子（2010）[13]は，「それが行われて初めて子どもとのかかわりが心の健康回復や発達促進の援助として生きてくる」とし，子どもを支援する際に必須の作業であると述べている。また，LP活動における見立てについて織田（2015）[14]も，いくつかの具体的な視点を挙げながらその重要性を述べており，「対象児の理解（アセスメント）」なくLP活動を進めることは不可能であると言えよう。この結果から，学生らも見立てをすることで目標や方針が定まり，係わり方が見えてくることに，初期段階において気づくことができていると思われる。近年，学級における支援が増加してきている（大西，2015）[15]ため，活動場所によっては「集団の見立て」を対象児と同様にしていく必要性があると言える為，今後はそれに気づき，言及していけるようになることも重要であろう。

「3. LP−対象児関係」と「6. LP−対象児−他児関係」はN=60（12%）と同等であった。前者は，LPが対象児と関係を築き，距離感を考えながら信頼を得て，深めていくことに着目していることを示していると思われる。後者については，「(1) LP−他児関係」の割合が高かった。これは先述の通り，学級における支援の増加によって，対象児以外の児童生徒と係わったり，支援したりするという必要が生じてきていることによるものと思われる。あるいは，対象児を中心に支援しながら，他の要支援の児童生徒も併せてサポートしてほしいというニーズも多々出てきているという背景も考えられよう。そのような場合，対象児以外の児童生徒との関係性をどのようにしていくか，対象児との係わりのバランスをどのよう

にとっていくかということも取り上げるべき重要な課題になってきている。また，対象児とそれ以外の児童生徒を仲介する役割を求められることもある。対象児と同年齢の子どもとの対人関係の持ち方を知るといった，アセスメントにも繋がる視点であると言えよう。

続いて，「4．活動の見通し」はN=48（9%）であり，「5．派遣先教師等との連携」，「7．自身の活動を省察（N=14）」はともに3%であった。教師らと情報を交換・共有したり，教師の対象児に対する係わり方を把握したりすることよりも，対象児への対応をどうするかという点に焦点が向きがちであることから，このような数値となったことが推測された。またこれらが，見立てや今後の係わり方，目標・方針などの見通しに繋がることを意識することは，現時点では困難であるとも考えられる。さらにこの時点では活動を開始していない学生も多いことや，提示されたケースへの直接的な意見を書こうとする傾向があったことが考えられる。カンファレンスは当然，発表者のケースを中心に議論されるため，付箋に書かれる意見として表れるかは別としても，今後自身の活動を省察するようなカンファレンスにしていくことは大きな課題であると言えよう。「8．励まし」，「9．レポートの書き方」はともにN=7（1%）であり，少数意見であった。しかし，意見の中には，「○○ちゃん（発表者）がんばれ！」といった直接的な励ましの言葉や，発表者の呼称を交えた活動のよい点を記述したものもみられた。これらから，同じLP活動をしている者同士という関係であるからこそ生じてくる励ましの言葉が，発表者の支えとなることが推察された。また，「9．レポートの書き方」についても，付箋への記述は少数であっても，報告書への記述の仕方，例えば，対象児とLPの具体的なやりとりを含めたエピソードの記述の仕方や，対象児や学級集団の見立てとその根拠，今後の活動目標・方針といったことに関して，自分が活動を振り返ると同時に他者に伝わるような書き方を学ぶ機会になっていることが考えられた。

2.「ふり返りシート」を利用したケースカンファレンスの意義

ふり返りシートを使用する前のケースカンファレンスでは，発表者の学生が毎回の活動報告書を読み上げ，その後，聞き手が質問や意見を口頭で述べ，必要に応じて教員やTAがコメントする形が定番であった。今回，ふり返りシートを利用して省察を行うことによって，以前は口頭で流れてしまっていた話題が目の前のシートに提示され，発表者も含めた全ての参加者が情報を共有できるようになった。その結果，活動初期では容易には出来ない「対象児の見立て」や「コミュニケーションの取り方」，「LPとしての態度」，「対象児以外の他児との係わり方」などに関する様々な意見や感想が表出されるに至った。

シートの利用により，口頭でなく付箋に記入することによって全体の前で発言することを躊躇している学生でも参加しやすい，取り上げたい点を平等に話し合いの場に提示できる，また付箋の意見をすべての参加者が共有できるという利点があると考えられる。また毎回の活動報告書（図1参照）は個人の記録であり，個人の省察である。「ふり返りシート」という“グループで”作成し共有したものが記録として残るという点においても意義があると言えよう。ふり返りシートを用いたケースカンファレンスの経験が，将来，教育現場でチームの一員として集団の中で協調性や積極性を発揮し、児童生徒に応じた支援を考える事のできる態度と技量を身につける一機会となる点からも，大変意義深いと思われる。

3．LP事業における学生の支援体制の構築

先述の結果を元に，今後本授業においては，学生が着目しやすい観点を意識した講義内容や指導・助言の場を確保することが必要と思われる。また，まだ着目するに至っていない観点についても，必要に応じて示唆していくことも重要であろう。それによって，活動初期から中期・後期の活動展開に見通しを持たせた省察が可能になると考えられる。学生が活動において重要と捉えている点や，困難に感じていること，課題としていることなどを，ケースカンファレンスを含めた授業内で捉えなおし，新たな目標や方向性が見出されることによって活動の意義が認識され，活動への動機付けが高まることが考えられよう。それが，LP活動の質の向上に繋がっていくと思われる。

また，LP活動初期と活動終了後に実施している「ライフパートナー活動に関するアンケート」では，「実践での悩みや疑問を相談する相手」として「大学教員」・「先輩」・「友人」・「TA」のいずれかを選択している学生がほとんどである。対象児への支援にかかわることだけでなく，関係機関への連絡や調整に関すること，活動に関する些細な所感なども必要な相手に気軽に相談できる雰囲気を提供していくことも支援体制の構築には重要と思われる。

Ⅴ．今後の課題

1．今後の講義内容に関する検討

今回ふり返りシートの分析を行った結果，LP活動初期のケースカンファレンスにおいて「聴き手」の学生の声として「LPの係わり方」に関する意見が最も多く，次に「対象児の理解」や知識に触れた意見が多く見られた。LP活動を進めて行く上で，すぐに利用できる具体的な対応を知りたいという学生の思いが反映したと思われる。しかし実際は2番目に多かった「対象児の理解」という対象児童生徒の“アセスメント”が行えなければ適切な見立てにつながらず，具体的な対応の仕方を学んだとしても実際の場で活かすことができないことが予想される。よって今回のふり返りシートの分析結果を踏まえて，対象児に対するLP学生の知識や理解を下支えす

るアセスメントの概要を，具体的な方法と対応した形で教示する講義内容を年間通して行い，その重要性を伝えていけるような授業展開を検討していきたい。

２．ケースカンファレンスの進め方に関する検討

「ふり返りシート」を用いたケースカンファレンスの後，ファシリテーターを努めるTAや教員から実施後の感想を聞いた所，今後検討すべき事柄として①ケースカンファレンスの時間の不足・時間配分の難しさ，②ケースカンファレンスの目的や意味の再確認の必要性，③ファシリテーターや参加者に違いによって，グループ毎でケースカンファレンスの進め方に相違が生じるといった意見が述べられた。

①に関しては，90分の授業の中で2名の発表者がケース発表を行っているが，実質，授業前後の連絡事項や指定された講義室への移動などで，1ケース30分程度の発表になってしまうことがほとんどである。振り返りシートを導入する事により，ケースカンファレンスの話し合いで表出される感想や意見などの量も増え，中身が深まることで，発表の時間が足りなくなるというグループも出てきている。その為，ケースの理解や省察を深めるところまで至らないといった意見が挙げられている。このような課題に対して，今後は発表者を1名にしてさらに詳しく丁寧にケースカンファレンスを行っていくという方法を検討している。

②に関しては，年度の早い時期の講義で，ケースカンファレンスの意義などについて触れているが，具体的な発表の仕方や進め方，シートの有効な活用方法などについては伝えきれていない。参加学生のほとんどが学部2年生という属性を考えると，ケースカンファレンスにおける発表者や聞き手の役割について文書等で説明を加えるなど，実際のイメージが沸くような工夫を授業担当者とともに検討していければと考えている。

③に関しては，ファシリテーター役としてTAのみが入ってケースカンファレンスを展開しているグループと，教員も入ってカンファレンスを行っているグループとでは立場の違いもあり，やり方に相違が生じる場合もある。また，これまでにLP経験のある3年生以上の学生が多く入っているグループと，LP活動を始めたばかりの2年生がほとんどの構成メンバーであるグループとの間でも，話し合いの深まりには違いが生じるだろう。理想的にはファシリテーター（TA）1名と助言者（教員）1名が各グ ループに入るようなケースカンファレンスが望まれるが，教員やTAの数も限られており，現実的にはマンパワーの確保が困難である。ファシリテーターと助言者を同時に行うことへの限界はあるが，発表者をエンパワメントすると同時に，発表者及び聴き手の学生が自身の活動に対する省察を深められるようなケースカンファレンスの方法を教員・TAとともに検討していきたい。

３．今後の「ふり返りシート」の分析について

本論文では，LP活動初期であるケースカンファレンス1における意見のみを分析対象とした。学校教育相談研究の授業では，同様の方法を用いたケースカンファレンスを年間通して5回実施する予定である為，LP活動初期だけでなくその後の活動の省察や学生の学びの傾向を追っていくことが必要である。それによって，LP活動の質の向上に繋がる学生の支援体制への構築に必要な点について示唆を得ていきたいと考える。

【引用文献】

1）稲垣忠彦（1986）授業を変えるために：カンファレンスのすすめ　国土社

2）鈴木静香･織田安沙美･大西将史･廣澤愛子･笹原未来･松木健一（2016）地域組織間連携による学校支援ボランティア事業の支援体制づくり―非専門家（大学生）を支える発達障害支援アドバイザーの活動実践を事例として―　福井大学教育実践研究 41.37-49

3）山本真人・菅野文彦・塩田真吾・長谷川哲也（2013）「学校支援ボランティア」の動向に関する実証的分析　静岡大学教育実践総合センター紀要 21.131-142

4）前掲　(3)

5）堺愛一郎・中坪史典（2017）保育カンファレンスで複線径路・等至性モデリング（TEM）を活用することの意義と課題―若手保育者へのアンケート調査から―　宮城学院女子大学発達科学研究 17.21-32

6）白浜雅司・小泉俊三（2000）実習症例をもとにした「臨床倫理ケースカンファレンス」医学教育. 31(6):443-451

7）山本真人（2014）学生の学びを支える「学生支援ボランティア」を目指して―ふり返り会と評価シート開発による活用と課題―. 静岡大学教育実践総合センター紀要 22.111-123

8）前掲　(2)

9）松木健一（2015）第1章1節ライフパートナー活動20年の意味　松木健一・廣澤愛子・大西将史・笹原未来（編著）大学と地域の連携による不登校児・発達障害児への支援 2014　福井大学・福井市・鯖江市・越前市・坂井市・あわら市連携事業　創文堂1-10

10）前掲　(2)

11）松本剛（2007）教師のコミュニケーション能力向上のためのファシリテーター研修　兵庫教育大学研究紀要 30.11-17

12）岩壁茂（2010）はじめて学ぶ臨床心理学の質的研究方法とプロセス　岩崎学術出版社

13）松本真理子・金子一史（2010）子どもの臨床心理アセスメント　子ども・家族・学校支援のために

金剛出版　3-４
14）織田安沙美（2015）第2章3節ライフパートナー活動をするにあたって必要な視点　松木健一・廣澤愛子・大西将史・笹原未来（編著）大学と地域の連携による不登校児・発達障害児への支援 2014　福井大学・福井市・鯖江市・越前市・坂井市・あわら市連携事業　創文堂　54-59
15）大西将史（2015）第1章4節ライフパートナー活動の現況　松木健一・廣澤愛子・大西将史・笹原未来（編著）大学と地域の連携による不登校児・発達障害児への支援 2014　福井大学・福井市・鯖江市・越前市・坂井市・あわら市連携事業　創文堂　27-37

Establishing the support system of the school volunteer program in collaboration with community organizations.

Shizuka SUZUKI, Asami ODA, Masafumi OHNISHI, Aiko HIROSAWA, Miku SASAHARA, Kenichi MATSUKI

Abstract：The authors have been implementing case conferences using “reflection sheet” in considering the ideal way of high quality case conferences to provide opportunity for school volunteers to assess their own activities. In this article, we introduced the practical approach of using "reflection sheet" to construct a support system for school volunteers who support students with special needs in schools, and also analyzed the point of view of school volunteers in the early stage of the school support activity. Based on the results, it is apparent that school volunteers mostly tend to focus on "the way of interaction with students” and "understanding of the target students" in the early stage of the intervention program. From the analysis of the “reflection sheets”, the researchers were able to gain a variety of hints on how to strengthen the support system for school volunteers.

Keywords：school volunteers, establishing the support system, case conference, reflection sheet, facilitator